

911.3
八
上

時代
模画

俳家奇人談

上

刻俳家奇人談序

曩小閑田子近世畸人談集録一載て生出する

方里来老河りといへども復そ其盛を継ぐものあり

竊予惟みるに永正天文の比小守武宗繼此清標

あり寛永正保名中より貞徳季分の卑卑あり延

宝元禄の間小宗因桃青は逸群あり且金一為武

貞室立圃重粒伝徳言水其角嵐富玄末文竹支考

許六北校性来山鬼費乙由不角原松淡淡等れ一奇

ありく生る小雜出する所の俳家も亦その人なりと

いふに、先人云々、選好、其、可、好、也、
若、の、為、不、解、す、所、り、八、十、有、餘、漢、楚、其、要、と、や、右、人、
れ、り、所、成、案、に、高、り、を、知、一、也、又、右、句、に、五、風、歌、の、
を、識、す、所、り、今、也、四、里、に、題、一、之、を、他、家、高、り、と、
い、ふ、後、来、者、種、家、幸、子、瀧、桶、摸、索、此、所、成、唱、す、い、漢、
崔、躍、何、り、と、是、一、志、如、人、や、子、官、文、化、丙、子、を、藏、
初、春、夢、歷、小、學、を、採、所、

儼偉閑人書



俳家奇人談序
倭歌者詞雅而俳句者詞俗也。比之彼詩
與談者俗而叶音詩者雅而有韻。固其
自然也。余謂雅俗異其詞。體裁遂別。文質
已定。而意趣亦互有優劣。其感鬼神動人
情。固同之。若其詠之人。意有雅俗。而其發
言不同。是故倭歌與詩。固雅而詠有俗者。
俳句與談。固俗而發有雅者。則雅與俗不

可以詞害其意也。竹內句當玄玄一者。所謂目雖盲不盲于心。而居常好俳句。其詠四時景象。言人事。喜戚閒遠之趣。淡薄之味。往往使人有無限可感者。不為不多矣。纂而輯之。名曰詠物句選。云玄玄一。嘗曰。古人之言俳句者不少。而欲尚友其人。則不可不知其意。匪事蹟也。於是乎廼撰有其美名佳句。而事之可以賞者。而遂成編。

名之曰俳家奇人談。其子再校而刻之。以繼其父之志。豈不懿哉。苟世之言俳句者。讀之辨。今古之文質。知意趣之雅俗。則有復裨益于風教。亦以為不少矣。古人有言云。誦其詩。讀其書。不知其人。而可乎。是以論其世。是尚友也。玄玄一。其有感于此者也乎。是為序。

文化乙亥秋九月既望王

江都 卧舫散人譔



此書之序... 其心所外師... 其心所外師... 其心所外師...



よを... 西上人の... 世にあ... ちあ... 年い... けま... ちあ...

[illegible]

一 田村に募て得る変名古画漢短尺出懐等並びて友人
張其の筆を借依る亦其此旨を解するの一助なり
也一や親る人それ諸氏恩一

蓬廬書畫識



一 田村に募て得る変名古画漢短尺出懐等並びて友人
張其の筆を借依る亦其此旨を解するの一助なり
也一や親る人それ諸氏恩一

俳家名人談目次

一 上之卷

一 宗祇法師

一 山崎宗鑑

一 杉田金一 附 英津女

一 松江重頼 附 春泥

一 山本西武

一 安原貞室 附 元次

一 齋友徳元

一 園女

一 軒成計軒

一 荒木田守武

一 松永貞徳

一 野々口左圃 附 野水

一 高瀬梅盛

一 鶏冠井令徳

一 北村季吟 附 湖春

一 石田未得 附 未琢

一 高鳴玄札 附 山夕

一 半井卜養 附 慶友

一 芳賀一晶 附 二葉

一 神聖忠知 附 蓮住禪師

一 池面言水 附 團水

一 井原西雀 附 正友

一 常矩 附 常長

一 菅谷高政 附 信德

一 上島鬼貫 附 惟中

一 小西来山 附 由平

中之卷

一 松尾桃青 附 其角

一 服部嵐雪 附 烈女

一 僧丈草 附 森川許六

一 東華坊 附 破鏡

一 惟然坊 附 勾空

一 秋之坊 附 李東

一 僧浪化 附 磨工北枝

一 僧千那

一 小川破笠

一 路通

一 梢風尼

一 智月尼

附 乙州

一 鯉屋杉風

一 野坡

一 越智越人

一 涼菴

一 曾良

一 原田宇古

一 知足一家

一 生駒萬子

一 山口素堂

一 下之卷

一 中川乙由

一 舍羅

一 露川

一 深川湖十

一 高野百里

附 琴風

一 紀文親子

一 秋色

一 櫻井吏登

一 水間沾德

一 菊岳沾涼

附 行尚

一 大滝三子風

一 立羽不角

一 梅路

一 大高子葉

一 加茂原松

一 桑岡貞佐

一 松本淡淡

一 堀内仙雀

一 活井舊室

一 清水超波

一 不醒巴人

一 横井也有

一 千代女

一 山口羅人

一 建初源傳

一 遊女談

通計目次八十有六談

一 玄玄居士略傳

附

今世名家數句

一 高麗西里

琴風

一 文縣子

一 高麗西里

一 高麗西里

仙家奇人談卷之上

竹窓玄玄一建初男道庵書事卷行

宗祇法師

宗祇法師沙汰年名比奈里一があはひと年一強く連歌の
おそ我関まう一又惜いふ家案十年間より連奇の計年れ
功を積づけれたる妙小針王雅一と答ふ雙いはく我ら十年
昼夜勤ふた如何と或人大う一阿たましく我ら及ふ所は
ずと感せしよりや漢北相如をに十よりて始く孝經を讀
唐の高適の六十ふ一と妙て詩我作あはれば此雙り連奇
建ち一と亦宜あふはや亦小伴の鬼妻も是を稱一と
當時雙ちりて記せ玉或時近隣は難産ありける候ちその
屋は暖く一摩何般若はらみ女の奇特う家宗祇一二も流て

さんの細くと宗長は綴りけるが官ち男ををせり又
時帝の瘡疾煩いせむつるに世更の連奇して金
むひーる有り云妙境に入と死ハ云奇時と候と少ふに
手號を種玉唐句物歌といふ何きの年ふり有けむ仲秋三
五北夜一天浮雲か、玉月の宴をふりける我歌く一をてせの
月を雲らに今歌うふけ句在今世はよく人の誦する有
又連懐一上世は娘るハ文小肘裏の宿うふ是二條院後波の古
奇小傳一吟あり後は蕉翁室に感懐一上世北中ハ文小
宗祇の宿うふとる慕れよりある松風と少老海に彼法沙
我宗よりく上世北中なる海屋一上世傳ふ文龜二年
七月お沙湯本に客舎に寂す案八十有二世を辞す海の奇
「はうちーや鶴の林の煙うも立ちくぬぬる身まを眠むま

荒本因守武

荒本因守武ハ伊勢因宮の神宮宗より和歌連奇我好く一時
小名あり或日連奇興は名席は思ふ法神の人くなれハ
「は産後をんまを何れもかみあけ宗祇傷う一をて一をて
雲北娘里烏帽子着てと附らけハ殊又興何里てとんえり
嘗く童子教誡は為ハ一夜百首を誦す一そおとに世中
二字我押は是我世中百首といふ又國人等重して伊勢海屋
とと稱せり且能借北鼻祖あり一え目や神代のりも思ふ
「櫻子や装束系系の落一種ハ調高尚人の及ける和歌
獨吟ハ句をたはに生世頌ハ一飛梅や軽く一我と神はなる今
「此篇我讀ハ不易の什多一風味之後末全一園め答る
名家を出すも此人我以ハ勢陽ハ棟梁とてふ小言むた

度會外宮之奠而其門

葉之所傳也先乾什

素出其泓嘗師余

難點止附與沾測

沾洲授之雪齋

後莫知其所在レ后乾什

索求而得之云爲其古物可知也今取

以圖爲

蓬盧青青



世に「いふ世に成る南堂阿彌陀仏とゆふ一賦は戸無原を仰西祐す成
句等の短尺は美拙出て」
 毎せり天文十八年八月辛巳しげに坪い世せ歌「越こく」と又また坪い末すえ
 神沼山うみち峯みねに雲鳳うみづ峯の松風しょうふう發は句「招まね顔がほふ今日けふと又また坪いん
 我わが世よ加奈かな

山陽宗鑑

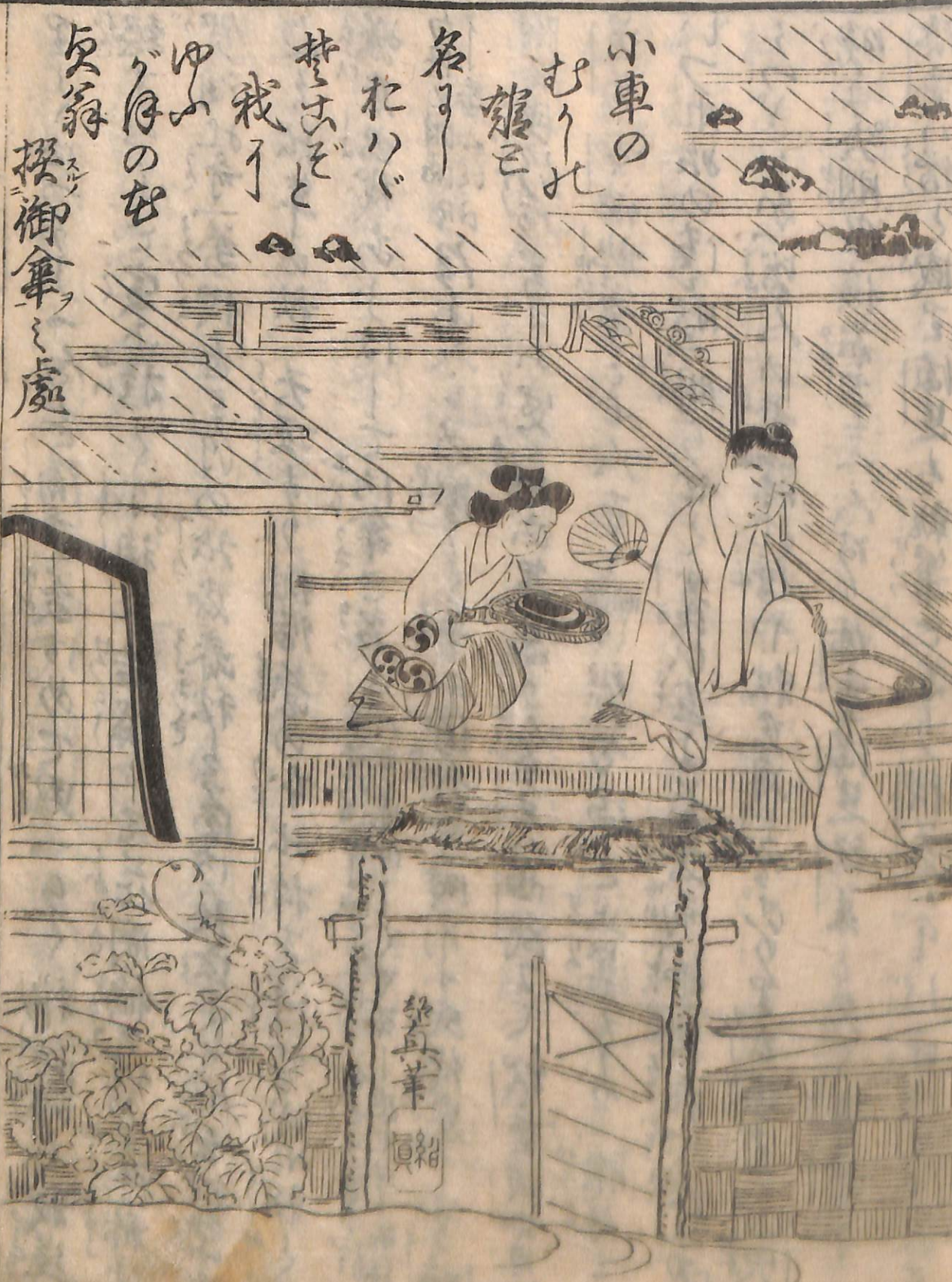
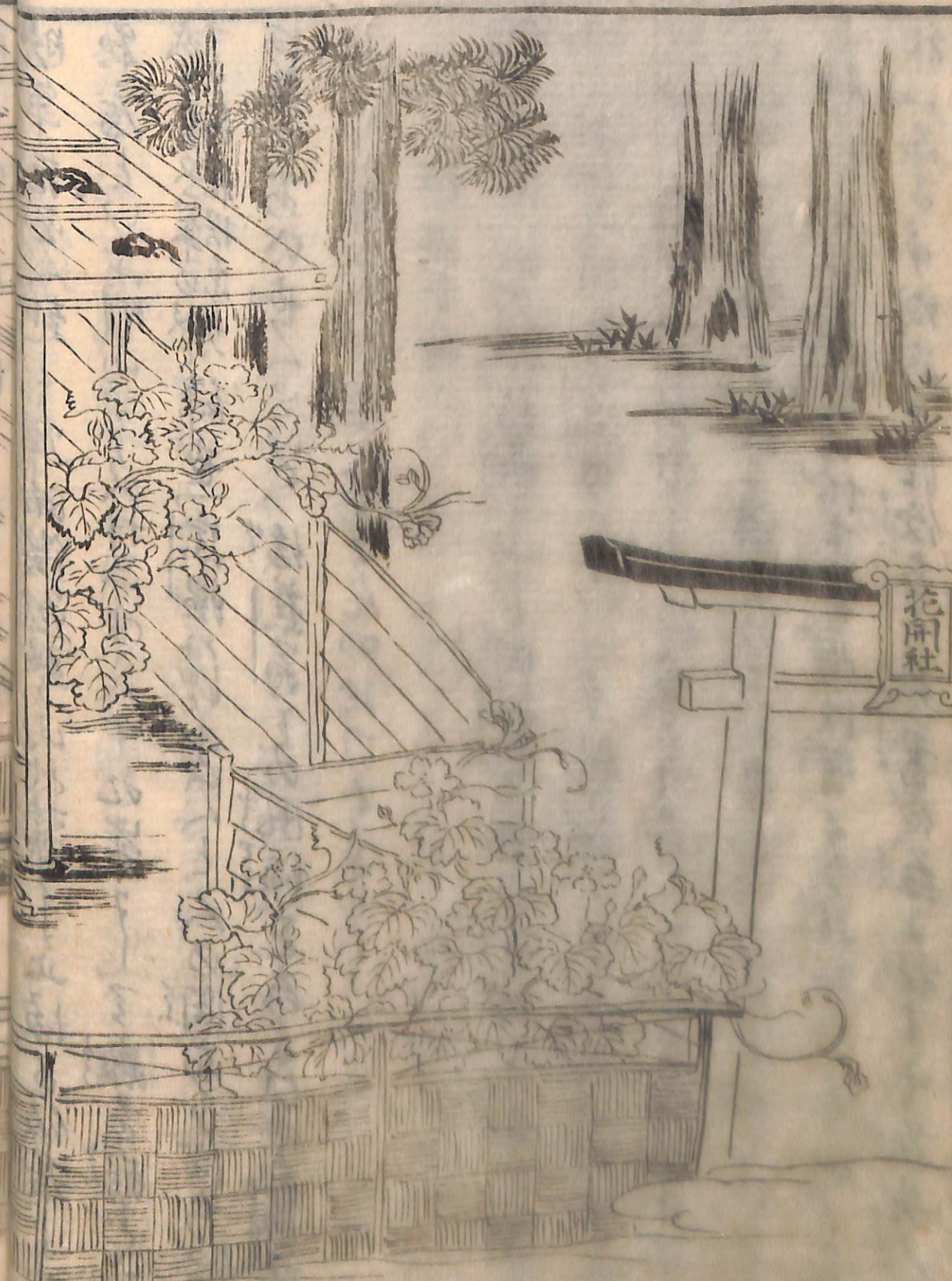
山崎宗鑑ハ近江所居人本姓支那氏トシテ代々足利家の
 侍なり長享元年依々本意於上洛を以て大樹義尚トシテ
 くら兵を帥テ追討シ勝利を得而も同く二年に功ありて
 肉大任小任せられ義熙と改む延徳元年義熙松榮ありす
 一ツ遂々豊后時小支那氏廿五歳主役の別茂然みま
 後仕一ツ利繁一ツ勝妙元々勝又佐一ツ後棟別山崎北竹林

道徳素より和歌連奇小達一又悔惜ももむざり或時道徳
 駿河(宗長)諸とも系係とてたてて雲一ける烟葉を
 て鉢里るふに法流一とて小おてる婆をえまば縁鬼つと
 と興一玉ひる我「おあん」とすれど其の沢水宗長「此一進
 言何地くるるん」強グオ三ふま(案ずるに難後集他満の研山公と云
 長ク松を産とち近事誠谷吾山あのはれバ清誓句在まれ生性のは
 る我町字す清誓を平記を準持せり)志むる変り或人「虎毛を借ふ常とくく」と爲て附句我全け
 「水香の尾羽れ寄けさ解く又一切くく」とあり切あくもふ
 といへるに三句所全せり水く「盗銭者一て又まば我子
 「け屋りある月銭かくせ」系系の校「公少記的矢れ少一」在
 彼句はと古雅あり「手銭ついて歌あう」よる嫌か「摺小本
 志ら系系と此花はりり」一筆を名ば雨もおもよ夜半を月
 晩年(案ずるに難後集他満の研山公と云)起く帰諸強が琴山に麓一止はる飯居一て一
 和唐といふ所ふて又廿二年八十九歳一と云難を病ぐ死す
 或る事又二年の奴と辞世「宗強ハいふ人との間あはちと
 河東てあひむく人といく後慈母その風流を志といふを舊記を
 居く「有ぐと記婆おがまんか死つと云と

松永貞徳

松永貞徳ハ幼名瑞態長一ても猶影義成米収を種を若一旬ら
 呼て延張丸は長長既れともいへり道徳軒と号す松永和奇連
 成好く玄旨法市を少り長嘯子成友より一年世系好
 院松竹を三條の大話又講す洛下此豪家何系ある若その言
 小振一て今若若若の地を寄附に昔より社何りく何ち家
 社此あるる成出の便ちを契書成茲は移す所在長人あ

花園社



小車の

むくれ

籠に

名を

たて

替はと

我う

ゆふ

ぐほの

欠解

撰御筆と處

紹興
眞華

里々につらつら一句を備す爰はめて思へらく神祇に就て
起すべしと爰小形く小祠を結構して花園橋南と奉稱す
賀河比奇「兼代を三月の社名春秋と云はれ実なる云はれ禁ま
るは年秋 云頂より姫諸宮の本此稱を許せられ初と云
嬌忠出我あはしては年三各く天子此は年三はし一合より
句接の附臨此は入との舉ぐき小傍於す時一武成定より始
附合興は河王一の宮此六年あり今主ハ西武よて秋重因如月能
道長令使執筆と七人あり附合興句能と正潔あり「睦月」ふ
いづれ始の清し時一餅らせく貴ひしよ云云雨「雲月花」一度も見
うづきうふ「皆人の重なる種や秋意月」冬ぶの里と樓まても穴
晩子夫明の後亦重二人あり殊重満足祝意と云く年長にて
可第の位なる里何年の年ノや有けんありて竟然祝意
大佛殿此南北才許多を湯まぐみ月うふ果樹茂地地
傍をおして材重と名く中小報恩花あり調るに妙経
千部の子昇茂以す養あり一六奇仙上官を子達磨大少人此
像を画くあり吟意磨あり詩奇連能若短尺を集む
小茅此丸屋兼屋を以て園に通じ方域東南武十石南北三十
石「兼屋」なる小竹を以ては今園あり字を握根を存
せり金権貴小幸せりともは此翁の碩徳あり承意二
年小致は高八十三辭世の中「眼目」形と時なりい
今や朽くくも習俗世のありいう系欠翁はドめ大志ありて
能は茂發起す羅山草山の友子を以てつ人と云はれ且南
重粒欠室為武樹屋今使季吟使え未得玄れ一雷安靜宗

松田全一 附 美津女

野以立圃

群に立圍初名釈重信姓離陸市属と北常飛鳥丸家
 此輩は近く平生お入して暗和奇忠及も多づさへ此里
 寺の釈主より出法を傳へ里特莊探幽より画創成地よりを
 ういひ己が長ずる所欠つ言足の才子あり八巻北隊を
 益忠五「水水や汗毛」傍も夕稜「山」堀と終ふの
 一「屋」ふけくさぞふふ活拵ふと東山世人嚏草を
 など興一玉ひいひを性の偏屈ある撰て後世の軌則と
 を述もまう一「差別」のあは洋うは撰て後世の軌則と
 うく是哉稱せらるる死する時年七十一「英文」九年
 九月あり詩

本張弓水を立南門もとみなとよりく公梅屋と号し「玄来る年くろきとしの歩あゆみや魚うを千里せんり」室暖むろぬきの船候はふぎを忍しのびと憲けん比梅ひめ「今日けふ比月ひづき霜つゆもあ

河川稻禁う家「新づり」望遠望や千重通ふ沙意を建ぐ
能得彩式を著つに享保十八年小死す

松江重頼 附 表流

松江重頼俗名大文字屋治右衛門能名維新といふ父家小邊を傳
習に空風格ありと立圃と修伴すべし「彼等とて慈恵を抄する
意もがふ」吐礼の持バウをゆく復壯うふ「秋やけさ一足は知
拭い極「料理河里穢み冬ふ」振とな「此子生侍成應
同つて交を絶ふと教多ふ少寛永の頃うとよ右子集を撰す
保時立甫「管火を河をせまう此条うふといへる句成加入せん
成頼む頼沙の句「雪ふを野中」の「同縁なればと交がはる甫沙の句
沙の句「沙も句縁よりほけ多るより進られけきこも遠く
件あるは是れ小あし「沙才代にみ姑く延より頼返く此等
他日甫成害せんといける沙海出水をひく徳才なく甫をも動
端せり又毛吹野成作れる時那山の西式とも矛盾なれよふ
あま「武治又父家亡母の追悼は「禁と意に著く此れ佛の教を
いふ句成をせり小頼あまを穢れより不快とい成より頼
室が裏の修を「招致と目まけ成るやはやふし「けといはに
けみりる室沙をひく「送火と「身此の「大文字といふ中
此句前表と成し「や沙子百とふく身はよりぬ延宝八年廿
十四歳あり

重本表流の初め重頼の門下「七後刻起れ才子と名ふ成
頼のつ徒「重頼重才重好重幸欠何り是城に重と名の生長
流その列は入る成頼に頼ゆるはす流あ水を志ゆあり「破
つて「貞想は属ありと「奈良法沙若葉つむや西小社「時めや

巨魁にてこれけつるまに正徳の事と死に

言淵梅壺

言淵梅壺の京洛小居して陀心子と号に「東より西へたははる
初因うふ」茶葉や席も喫ふも悠々たる「何人の屋敷とあるか
誰う茶」茶室を水邊や池や山に又寄る小建する此の
何より茶室へ「何の茶も飲め」飲めぬと固辭して何人の
吟を進めり吟味の 茶室へおるの是は松老が先客あり
元禄十二年四月八十九歳に死に

山本西武

山本氏之初名系初は僅して綿を賣る後に入道して西武
といふ号を初めと風が好くも号に「大上戸」云々小在りふさ
果て何とせむ「茶」も子成生ば三ふれ月夜に金持の懐さう

賣店子う茶世人茶葉より茶家の執筆なりある秘訣悉く
習ひ得たり少くも毎茶三物を組む他小洋さば性我と西武
西武と称みま茶成法のひとち氏時より茶室病床はた
此ふ小能の武を懐る虫はいはく

能潜批点の後題金中「何ち洋茶中の批点」次人ぬ茶像
一幅茶中の金茶小掛可程の遠相小張茶中の茶

霜月報白

長頸丸刺

西武版

雪月人多茶中「新油切」茶戒せらるる「何の茶加小叶ひ
る」ちりて時人中金王とぞ少死してより「茶室」を編りて
初心成茶初樞といふ出を茶室「茶」の庭茶室つ何の年「茶

白

逢音

逢音

逢音

逢音

逢音

逢音

逢音

存け世七十三歳一々死せり辞せ「世の暇」云々
云々「中」澤七つ

聽冠井令德

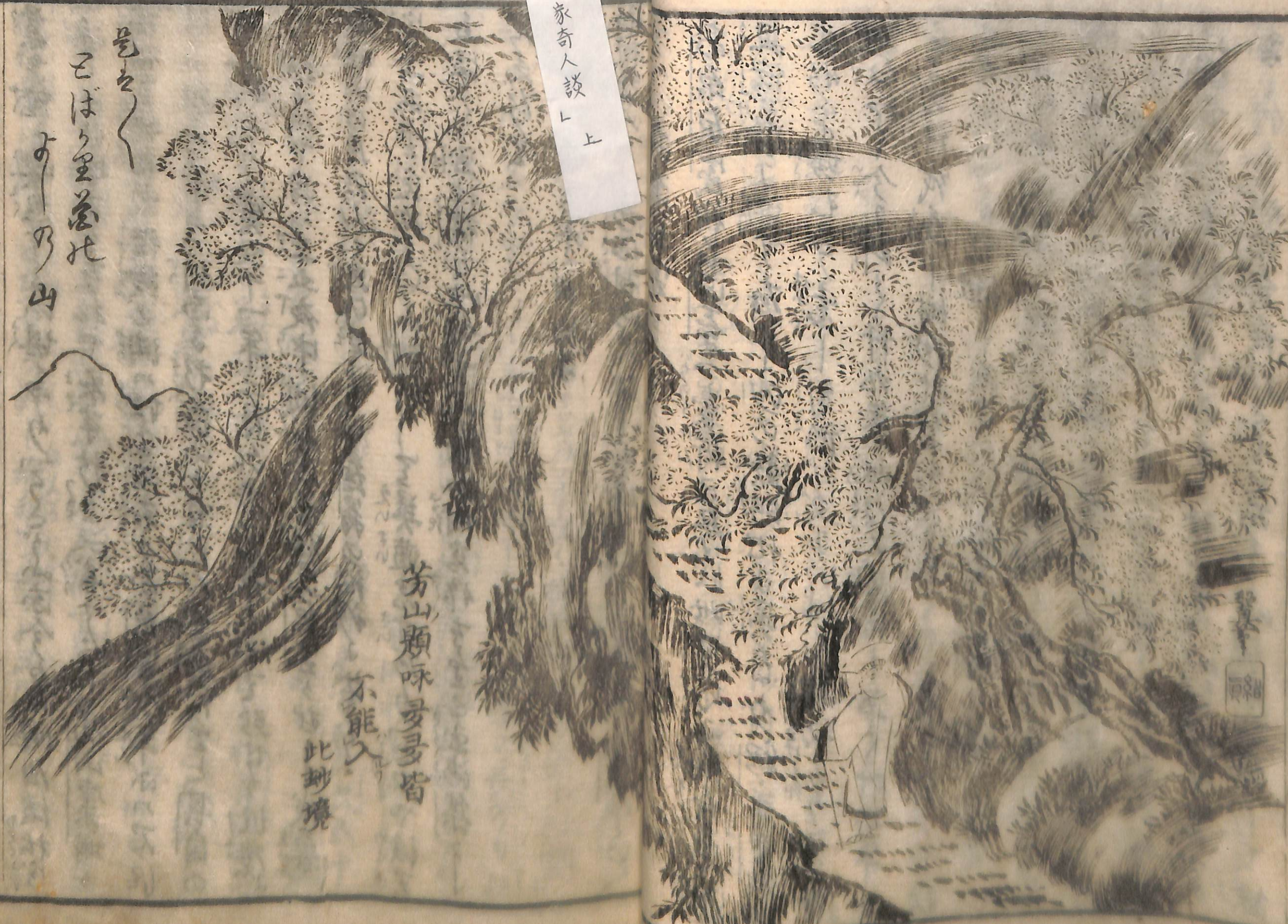
冠井良連の系沙を人地傳唐と号に後子武
 天皇十三代は連を避く之連と改む倭は波は波
 子「稻妻」のねとけりてや夜連皇社傳を連の稻妻の
 子「稻妻」のねとけりてや夜連皇社傳を連の稻妻の
 武は倭の獨吟子句成るに沙海と添くは武を感する
 延宝七年九十一は壽を終る家傳地波集「日記と有
 て」歌「何ぞ我するに」此に「何ぞ我するに」
 此三詩中「何ぞ我するに」の意と「連」は「後」に「延」に「思」

附 欠 欠

安永長字初名正家（裏斬）と号に世傳ふ能く可なり
 且徳義に達するあり沙の餘賜也（にめ）も実なり銀堂を名
 ずるを嫌むる（嫌む）意（い）一（ひと）句（く）廻（まわ）りて父（ちち）よりはく我（われ）知（し）り（し）る（る）なり
 訓（し）は（は）今（いま）訓（し）廿九年（にじゅうきゅうねん）世（よ）及（およ）び是（こゝ）に（に）一（ひと）く（く）廿六年（にじゅうろくにん）と
 主（しゅ）家（か）伴（ばん）成（なり）交（か）一（ひと）時（とき）沙（さ）は（は）彼（か）句（く）天（てん）長（ちやう）く（く）ち（ち）を（を）不（ふ）せ（せ）る（る）や（や）秋
 月（つき）とい（い）ふ（ふ）小（こ）澤（さわ）一（ひと）志（し）主（しゅ）人の（ひと）意（い）家（か）父（ちち）を（を）恨（にく）み（み）一（ひと）室（むろ）の
 子（こ）右（みぎ）風（ふう）中（ちゆう）に（に）生（な）れ（る）稍（しやう）そ（そ）志（し）の（の）端（は）城（じやう）を（を）く（く）ち（ち）て（て）是（こゝ）に（に）名（な）
 作（し）る（る）後（ご）代（だい）な（な）る（る）人（ひと）耳（みみ）成（なり）車（くるま）轉（ころ）る（る）世（よ）に（に）傳（た）る（る）室（むろ）并（なら）び（び）小（こ）澤（さわ）と（と）世（よ）
 分（ぶん）を（を）堪（た）へ（る）乃（すなは）ち（ち）嚴（げん）東（とう）行（かう）一（ひと）又（また）二（ふた）句（く）成（なり）存（ぞん）す（す）は（は）當（たう）れ（る）處（ところ）家（か）
 此（こゝ）に（に）食（く）ふ（ふ）能（よ）く（く）為（な）す（す）に（に）是（こゝ）に（に）月（つき）を（を）み（み）る（る）一（ひと）時（とき）の（の）意（い）成（なり）て（て）是（こゝ）に（に）作（し）る（る）や（や）及（およ）び士（し）の
 音（おと）を（を）聞（き）く（く）所（ところ）を（を）我（われ）に（に）と（と）有（あ）る（る）一（ひと）時（とき）に（に）嚴（げん）成（なり）存（ぞん）す（す）一（ひと）と（と）餘（よ）

6203
俳家奇人談
上

俳家奇人談
卷之十一



芳山題咏
夢夢皆

不能入

此妙境

是之
こはく
山

俳家奇人談
卷之十一

業を焼く嘆息する小堪ありうごふふ今々の國は松竹
 「涼」はの堅ありちれや夜半砂を又弄する一高山棠樹
 西指若掛抱小「借錢の淵」はまぬぬるふ久富少年ふんはに
 ほど死するなり何あるお花ふり有けんいこ興何と其角の
 記又載りり寛文十一年二月六十に業うご死せり此後
 一松陰や月ハ三立夜中納云と生狂文欠室がむり成業
 鹿嶋山の月えんと思ひ立ちるう蕨箱の記は出り
 室子あま元次とのふ幼にう英邁才何り七夕や後王
 多はく玉北橋と此句十三歳の時作ち全と玉法集り
 万えたり

北村季吟 附 遊書

里後一平安玉津岩の府祝とを依能浩を学ぶの初め欠室
 城少一中年より欠室府祝を交う拾穂形と号せりと室
 離る時の名ち全といふ素情吟強記りて國学は長きり後
 進その及我主とする若大平此書を刊し源氏ものごと
 一遊月抄を著し松林うりて玄曜抄を述に全
 大和物がとま佐佐木小郎るあに注評す依取の全十
 餘種よれよと全とちんはれは全学はるりや
 家の強又述して華東く召れ奇学所又補せられ食源なる
 万我端つる簿り名譽此事あふはや能風いよと右轍を
 税をばといども又一種の種額有り「一僕をなくく何あり
 全刀々系」後筋我あ全とや笑ふ系橋「め鳥を喻るあハ
 肉信哉」はばくと左すがぬし流泉「あまは山砂をともをた

家系の宗伯が作を續で増山北井茂撰に御寄みふはる
 依る宝永二年八十八名年嘉を續ふ
 息源表こそ小奇掌所ふ古縁花果院と号に後生畏ふと
 此子の風格所、乃翁小ほはる「蝶舞」に、はる若抱ふり月哉
 名の附ぬわかたゆー山機「目比」氣北附ぬ松河里揚雄「大地」
 此此とてゆ。時取ふふ元禄十年父又先づつて死に五十一
 餘歳をむむむ

次後傳元

新嘉氏ハ江波波集此人ものと織田秀信小はる秀信石田
 著一級するに及ふ己をも亦長江河を渡り適利勢一て
 傳元と改名一帳字己号に初免松可哉指南一て江戸佐樂
 田舎おこはの屋名幾めぐり名籍「育」くらふと能れ、一ひす傳元
 蝶の舞傳元沙面は留らん来江下又獨吟千句を和く名
 人、から伝嘉永中重粒物子集を撰するの時秀遠方り
 書院小へ一句「妻」月や小月人同出、知つの松遠一一世の作
 若と稱さる所「大和」とも屋とていそ「物」を此里「何」を「ん」と
 若やと云ね抱ひた、著す取初小抄有り江に於て能出を棒
 す、はる我姑と江若別小抄、此す祥世「今」はで、生多ハる
 月夜、か是大空輝の文、小橋水り回く知化如夢如影如氷月と妙
 宗ほりか

石田未得 附未得

石田又なるハ江戸妙人、友智所小住きり何なるありや云くお
 妙、傳る幾程もち、再到江戸一來、王様を中、く名を未得

王改め徳元云れと受うと云一七室利徳元親王受て
小令一乾雲と号に「葉子や」の巻もむるあ、の巻「乾」一
七藤ら主奴奴とふふふふふふふふふふふふふふふふふ
拂けに室にに極ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
字を名成ふと使極ふふふふふふふふふふふふふふふふ
稽古時缺を云一受又九年七月二十有餘一七此に
男刺母父の巻を徳く良徳と号に「海客は徳」の巻や徳
系系と程亦をも徳く一く一く一く一く一く一く一く一く
此巻我云ふ

高鳴云れ 附 西文

高鳴云れと張河山田の産物新我物母家とく一受て徳を
今巻不傳ふる巻也此巻に戸一受て徳を云一く一く一く

徳物を徳一ゆ生性もて非親一と云ふと云一なる徳
女と云海云一と云業より徳れと徳王と申一
けるえと十二の巻よ受る「時」受て今年に徳く一十二
神威と探曲ら最士と徳れ徳我云らに「必」云一や云
あうと最士と云一又「受」受てのり母と母と徳と云
「香」の何うと云真か一と云は云時と云一と云徳の何と云
云一と云受は云一一年産を徳らに徳ら徳すれども
功徳巻せに教目と云居最云一と云受は云と云れと云
を満す徳にと云徳と云百龍と云ふと云徳と云「卵」の徳
徳る「卵」のた一と云ら「と」徳と云と云と云徳と云徳
と云徳と云と云徳と云一と云徳と云と云徳と云徳
「巻」徳と云と云徳と云と云徳と云と云徳と云と云徳と云

なとち^{なとち}添^{ぞう}云^{げん}一^{せん}てき業^{げふ}より能^な潜^{ひそ}れうと^{ほされ}穠^も里^りなど申^{まう}一^{いち}
ける^{いふ}とど^{いふ}は十二^{じふに}のまよ^{まよ}える「守^{まも}り^りぬ^ぬ今年^{ことし}ハ^は居^ゐく一^{いち}十二^{じふに}
神^{じん}或^{ある}人^{ひと}探^{たん}函^{ぽん}が^が奴^{やつ}士^し君^{きみ}給^{たま}は^は契^せ我^{われ}乞^こる^るに「名^なをえ一^{いち}や^やは
あ^あう^うう^う奴^{やつ}士^しを^を寄^よう^う一^{いち}又^{また}「^{はく}^く^く^くの^の何^{なに}と^とめ^めで^で友^{とも}相^{あい}を^を添^{ぞう}
「香^{かう}の^の何^{なに}と^とめ^めで^で友^{とも}相^{あい}を^を添^{ぞう}
一^{いち}と^と宣^{のたま}ふ^ふは^は一^{いち}年^{ねん}瘡^{そう}を^を病^{やま}る^るに^に旬^{じゆん}ら^ら瘡^{そう}ず^ずれ^れども
功^{こう}我^{われ}奏^{そう}せ^せに^に数^{すう}日^{じつ}引^ひ出^で居^ゐぬ^ぬ一^{いち}と^と好^{このめ}る^るに^に旬^{じゆん}ら^ら瘡^{そう}ず^ずれ^れども
を^を消^{しょう}す^すは^は為^{ため}に^にと^と獨^{ひとり}吟^{ぎん}せ^せ百^{ひやく}韻^{いん}忘^{わす}る^るふ^ふを^を知^しぬ^ぬ「^う^うの^の^う
落^{おち}る^るハ^ハ風^{ふう}の^のた^たこ^こ里^りの^の一^{いち}い^いざ^ざと^と燃^もえ^えせん^{せん}松^{しょう}字^じと^と此^{こゝ}附^つく^く祈^{いの}禱^{たう}
「や^や威^{おど}ろ^ろり^りの^の聖^{せい}種^{しゆ}ハ^ハいつ^{いつ}と^と落^{おち}ふ^ふけ^けり^り或^{ある}と^と犯^{はん}連^{れん}中^{ちゆう}る^る族^{しやく}
一^{いち}書^{しよ}持^も来^き里^り點^{てん}せん^{せん}る^る我^{われ}知^しむ^むと^と速^{すみ}書^{しよ}一^{いち}て^て迷^{まよ}は^は廿^{じふ}日^{じつ}ハ^ハ里^り

又同巻城米一石れ名文のみ有る一巻と云ふ
 倭王一巻持形一巻父子二人に面影ある今巻
 ありと云ふ一巻あり再巻あり七巻あり又翌日市中
 打揃ひ取巻を拾ふ一巻は一巻此巻本巻と云ふ
 然れ引合む一巻後の巻に點多くある何れ何れか
 如し一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり
 我も強はるや一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり
 生れあれと云ふ一巻あり一巻あり一巻あり
 門人男女に父と母一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり
 代一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり
 うる一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり
 一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり一巻あり

池田正武

[illegible]

いふ出我美して生作の何屋より我毎トより粒僧人ばて大
う怒り直ふ果し怖を附より式色又強に粒が公をちぐはめ
強く層みりる何人その柔弱なるを減弱者より里一中ふと
主持てる身は強ふるにける我種美を添も有しこと又狂奇
をよめたり句らの奇合計百その何り作名して平野實村布
田造二人とせ里今江に流る海にす狂奇者海濱古の狂名と名
留まらや捕とるあさん

荒木加友

荒木藩邸醫術を以て江戸板橋町にす久至一年上原
矢つより狂名我加友といふ寛文中此人より生句おほく
及に今人より疎るるハ上代下えいさう山の意不ふそれ
年壽を志らるる同村中村は同名の仇持りて表陽朝

市井ト養 附 養友

市井ト養子と寛文の頃名は五沙に法眼又昇をせり
和学に通じ狂奇を能に初め宦途を縋りて鉄泡沙の地面
押録名付ト養ハ本屋とて思ひしよりみち我えりハ外科
るる又狂信をせしんで久病又復あぶ「改年の内養友親の
天下うふ」表より己室やゆふげれうくら
市井氏も狂淫性ト養を衆妙堪人牡丹を養を人の子と
をいふを嗜む名を養友といつ「福倉や本此九粒の青山椒

牙賀一鼎

牙賀一鼎ハ系沙此人はトめ狂信を信強又復なび後又信
此つ下ハ属す「初日ハ光里うと居く鏡山」短歌ハ子又其ふ
母の登収うふ耳ゆく所又まをすゆれた時ぬる「松原」飛

江戸外子
小外子
小外子
小外子

しるし

しるし

しるし



しるし

しるし

勝あはは—^{かき}雪を^{あは}雪^{あは}雪^{あは}年々^{あは}に^{あは}極^{あは}ら^{あは}ぬ^{あは}少^{あは}の^{あは}平^{あは}波^{あは}傳^{あは}へ^{あは}く^{あは}に
戸^{あは}一^{あは}来^{あは}王^{あは}冥^{あは}靈^{あは}堂^{あは}と^{あは}号^{あは}す^{あは}室^{あは}永^{あは}に^{あは}序^{あは}は^{あは}月^{あは}ふ^{あは}十^{あは}有^{あは}餘^{あは}年^{あは}の
—^{あは}に^{あは}死^{あは}せり

中流矢宣 附二條

中流矢宣に^{あは}嫌^{あは}ふ^{あは}子^{あは}と^{あは}号^{あは}に^{あは}父^{あは}と^{あは}名^{あは}を^{あは}形^{あは}に^{あは}禁^{あは}せ^{あは}り^{あは}とも^{あは}稱^{あは}せ^{あは}り^{あは}初^{あは}め
季^{あは}吟^{あは}ふ^{あは}は^{あは}ふ^{あは}人^{あは}で^{あは}後^{あは}に^{あは}父^{あは}母^{あは}に^{あは}倚^{あは}る^{あは}季^{あは}流^{あは}中^{あは}に^{あは}中^{あは}流^{あは}橋^{あは}あり
位^{あは}せ^{あは}り^{あは}「^{あは}目^{あは}比^{あは}な^{あは}や^{あは}秋^{あは}津^{あは}す^{あは}と^{あは}ち^{あは}の^{あは}元^{あは}正^{あは}比^{あは}年^{あは}「^{あは}院^{あは}室^{あは}宣^{あは}祿^{あは}つ
包^{あは}む^{あは}や^{あは}雪^{あは}の^{あは}成^{あは}時^{あは}吟^{あは}使^{あは}を^{あは}傳^{あは}へ^{あは}「^{あは}き^{あは}け^{あは}幾^{あは}は^{あは}季^{あは}吟^{あは}は^{あは}傳^{あは}り
雪^{あは}の^{あは}後^{あは}に^{あは}「^{あは}流^{あは}室^{あは}の^{あは}お^{あは}「^{あは}る^{あは}も^{あは}流^{あは}は^{あは}庭^{あは}の^{あは}松^{あは}と^{あは}吟^{あは}使^{あは}を^{あは}傳^{あは}へ^{あは}
さ^{あは}り^{あは}「^{あは}子^{あは}も^{あは}何^{あは}を^{あは}—^{あは}季^{あは}流^{あは}の^{あは}比^{あは}中^{あは}に^{あは}季^{あは}流^{あは}を^{あは}傳^{あは}へ^{あは}子^{あは}と^{あは}お^{あは}の^{あは}室^{あは}子^{あは}二
條^{あは}の^{あは}能^{あは}傳^{あは}を^{あは}好^{あは}む^{あは}一^{あは}年^{あは}之^{あは}月^{あは}「^{あは}死^{あは}ぬ^{あは}と^{あは}い^{あは}は^{あは}る^{あは}告^{あは}あ^{あは}り^{あは}子^{あは}の
は^{あは}る^{あは}「^{あは}の^{あは}父^{あは}父^{あは}字^{あは}義^{あは}國^{あは}と^{あは}い^{あは}は^{あは}る^{あは}「^{あは}を^{あは}字^{あは}を^{あは}傳^{あは}へ^{あは}形^{あは}句^{あは}中^{あは}に^{あは}「^{あは}を^{あは}

祚睦忠知

西山宗國

まゝく玉を玄少竊^{くま}りて能^{おそ}く還ふん我^{わが}よせ欠^か風我^{わが}感^{かん}破^はりて一派^{いつぱ}此^こ
 始祖^{しそ}と宗^{そう}族^{ぞく}雅^や髣^{ふう}りて宗^{そう}國^{こく}と改^{かい}名^{めい}り起^{おこ}の氷^こ野^のは函^{くわん}樓^{ろう}一^{いつ}枚^{まい}て
 雅^や波^はの天^{てん}滿^{まん}はト居^ゐに世^より梅^{ばい}冢^さと称^{なづ}せり無^む我^{わが}忘^{わす}吾^ごと号^{ごう}一^{いつ}房^{ぼう}
 を向^{かう}榮^{えい}といふ此^こ翁^{おう}重^{じゆう}柱^{ちゆう}と交^{かう}り汝^に知^ちる鬼^き妻^{さい}が筆^{ふで}記^きは身^みとら

小梅孫重親を少と云いえるの程なり案すゝに重親は父孫とふ快の後里村ありて
 遠寄をゆふ小梅孫つを回して少くお舎し往來すといえるより阿やより來りる
 といふえより鬼妻は同母重親を延宝の比江戸にて松玄が柴俵徳林
 少とて少とをいひ返さるるに
 我唱初より小折後此更の下向阿よりを遠く江戸十石藪を興
 して乃我弘む生老死ふ小梅翁「少」此の家小徳林此本阿より梅のた
 時より奥列岩本の城主風虎落泊此二公少つ又入玉ひてよ手の少
 ありありあるの源流はすく弘すゝにころや或日市村より芝
 居尺物に仍とるに折後蕉翁居合らわく初て此孫又對面せり
 阿よりもつ人何果が句案より子とほけりより竹と通つてよ此又久

方圓相撲大

時をかくきく外との
せめく切な垣根外れ
風うき草麦一穂を我者
雲もくして廻又う状
取出火打竹筆月
鍔すそけつかり金あ秋
少とるう終てあつ時
遠海を歩かて方ちあ
歌ある川波さー廻向れ
高き

泥塗のちるさく風さびく
同様をいさめく人あはれ
うん流儀して疎ぼけ
は世影ひれしかく秘ある
大河うへに船海よる
礼歡や柵 出来せさか
無火焼てあ同るう
若札を以十八ヶ所おき
疎治乃國入結持お秋
時味れあをさるのきう

さうなりはつて浦はり
祭礼を後ちあうら友
きりやうのそらうく
うつりきれらう二双袖
花乃せりそむやを
何ぬれを定ぬる宿のそ
ゆきうへあうり
花乃遠耳あうて
風のけれあうけわ
先イ口ハ布目れ
名

さうら眼うぬれと
腰よりト九条うら
腰血あうりよはけけ
小松系恨うを
世を銀流うも
相をあらわむれ
あうり
伴軍云十九
長六
梅

時をめぐりては外道の
せめき切ぬ恒根即れ花

風ふりて蕎麦一穂を我者よ

雲もあびては廻文乃状

おとし火打竹筆此月

鑑すもけつる夕暮の秋

かこもる猿てちあ母之家

遠海を歩けりて旁ちのち

歌ある川波きし廻りけり

さうなりは後ては浦なり橋

糸れを復ち交つては友を

きりぎりすのそとく歌を

かつのきりぎりすは神風

にろせりてはちやを花に

村ぬれを定ぬるは宿のそを

ゆりてはちやとを花に

花のちや耳はあはれては

泥のちやと夕風はあひく

同姓をいさあしと人なれ

非家奇人談 卷之十一

うんははらへては建つた

大河のちやに流るは

礼讃や柵 ぬれせきか

無火焼ては風呂乃橋

若れをに十八ヶ所おき

孫は乃國入はちお親に

ははち交ををるはち

さくら眼に内はちと

孫より下九ヶ所のち

膿血のちやにち

小次郎眼に又をち

世を銀花にち

村にちやにち

あはち 聲あはち

付しちやにち

ちやにち

ちやにち

ちやにち

土町詞堂新

[illegible]

甘肅西征

井原西屋の梅海のついでに大坂徳林堂へ入る一日
 新に社に於て福吟二萬三千句を成し、又
 二萬句も稱せし梅海堂と号し「我意の如月」も成
 そ初度「平持」や成さく生るゝと足は「も」も成し
 ゆく成るゝ「鯛」の意を足ぬ里も何と今も此月「大」も成る
 此世の定るゝ人をも「大」も成るゝ生るゝ人をも
 成るゝ人をも成るゝ小「大」も成るゝ「大」も成るゝ
 成るゝ近代戯作者の「大」も成るゝ「大」も成るゝ
 成るゝ人をも成るゝ「大」も成るゝ「大」も成るゝ

推本求源附錄

惟女氏字ハ少女^{おとよ}流^は逸^は如^は人^は喬^は德^は輝^はと稱^はすハ一^は女^は國^は武^はの

田代松玄 附 西友

田代松玄は江戸の人延宝中瀬浪仙と号して友人西友と名を合
せ浪林と号し一室調日く小変化一字の働一句此録情
宛人を勤候一む是我名く浪林飛軒と名く一癖くや春子の
若者松修以一方おや昔より一海堂北骨の江は生風より
づれに皆人能潜てハ云々一是六の子と西友が功ありお前
梅翁の東好する小遇く百小後く十面顔等を様行一はけ
江戸浪林はうんふり一と京堂

正友と伴歩妙人松田金つが才ちを延宝の江江戸へ来り松玄
己力成合せくも此江成廣む一入おの隆安つけぬ云と云

菅谷言政

菅谷言政は京洛の人何れゆつと遊ぶるを云々江國時江戸

ふて盛んは浪林はるく己はお此水と云ふ第一一末名を
れす武派の熱本古と幾句一て句ら想本古す道社言政
と名けりあり古風名能士と年福まもく記家子代の松
加はせり産の神くく一松又ん小桶は泥鰌をぐりみ又一風
家と稱一つ屋し

池西言水

池西言水の京洛の産く此能風玄れより出づる能く
義朝と号し風下雲と号し元禄は名に才小震ふ云々
と云ハ本松の果々河里より海客有語盡而意不盡可謂至妙
是より一て本松の云水と号すも宜きなり云々
江の山あり一尼寺よ唯業此花の表る徑一子知けり良ハ柳一
伐水より一文抄く表附けり榮名松一本柳くある人ふ一著

侍殿怯謹

伴後依使神名字尙柵材園と号に東清^{ひら}く居^まて和^わ及^あ我^{われ}
 愚^ろ等^らと日夜^{ひるや}お舎^いしと憚^{おそ}る我^{われ}候^うするより化^くる者^{もの}といふ
 或^{ある}日^ひ東武^{とうぶ}菴^{あん}慈^じ意^い庵^{あん}より文^{ぶん}忠^{ちゆう}を繕^{あづ}く上^う都^との風^{ふう}作^{さく}いふを學^{まな}ぶ
 杉^{しん}島^{しま}友人^{ゆうじん}教^{しやう}聖^{せい}樂^{らく}と能^{のう}で洒^{しや}粒^{りく}斗^とふおふ興^{きやう}ふ余^よ一^{いつ}句^くを作^{つく}て
 詠^{よめ}く答^{こた}ふ一^{いつ}兩^{らう}於^お月^{げつ}やつはげくけうけつはとて即^{すなは}妙^{めう}知^ちぬ
 「^い士^しに流^{りう}る三月^{さんげつ}七日^{しちにち}八^{はち}日^{にち}の余^よ古^こ今^{こん}題^{だい}芙蓉^{ふふ}作^{さく}無^な出^し此^こ篇^{ぺん}右^{みぎ}者^{もの}可^か
 稱^{なづ}通^{とう}海^{かい}一名^{いちめい}月^{げつ}や今^{こん}我^{われ}るはるる子^こと何^{なん}ん哥^か子^しいはくいはよひの

實や人此世の中といへる親なり是れ今年就中揚先
 白氏の年を無くるんも叶いて老の誅を悔ひてと
 り至氣言きて学の本を「昭著」て大振う候へ
 や女も眼鏡をけり此言みふに備すべし或は小
 幼ある時欠けは身や病その方を免れず小使に
 記ては病奴して後の西武梅盛より後学ぶ所
 盛成少とせりと中年志づく後林の校は興
 作を變じ晩年眼を害いて正風は帰するところ
 十一月六十有餘して歿す

墨如附體中

手ぬを染所松坂の人生せいふつ質和奇を好て風流有り能満すと
 吳津め成妙ううく生佳境りきやうううへる「和河ううや左衛門様の

一ノ
二ノ
三ノ
四ノ
五ノ
六ノ
七ノ
八ノ
九ノ
十ノ

一ノ
二ノ
三ノ
四ノ
五ノ
六ノ
七ノ
八ノ
九ノ
十ノ

一ノ
二ノ
三ノ
四ノ
五ノ
六ノ
七ノ
八ノ
九ノ
十ノ

一ノ
二ノ
三ノ
四ノ
五ノ
六ノ
七ノ
八ノ
九ノ
十ノ

機軸同阿爾子かゆ茶の茶と異曲同工不知何先
抄ゆく去の筆本うふ一頁とふふ数ふらるる
此修達を尋て紙子うふ色は女流の興象はと稱す
時中亦に成おく流意は極る此にともになつて
或時意解は抄て來るとはすふらるる後極る
筆めり教恭うく礼阿はを感づて一書業や目ふ
塵もちり筆め振て一五禁ふめ成極は極る
より東武人下里解了隨從す海双て後い又
阿あぶ一筆極ちる系流を過連一機に戸へ還
伯て眼科を以て度の書とて女流琴風が記は
わーり世事に疎く被下書五弦切く下弦の
張文庫に蓋成るる水奈うふ用るちんと持
支起るるも風雅のうん此興を至るしを強
天窓の冬とれど書中を十筋ばかり残る極
ハ唯一つむり成る成る一初め如き若ゆ人
せーりや句ら雲虎和尙は答ふ出るも
束出の強指尺寸の不求ま不求忘の太及
海和保ふる孫くは一心源はよよての
弘明唯その修てたふ句をいひ
草益此に業ちるは一切経も草益の
嬌に我平の若の念仏と句とちり極
よ地獄へ入るの同出る一和玉
燈已耀一燈心中黙つる有明鏡全識人
り知るれ有る何ふにせふとあふぬ法
非人炎 卷上

支起るるも風雅のうん此興を至るしを強
天窓の冬とれど書中を十筋ばかり残る極
ハ唯一つむり成る成る一初め如き若ゆ人
せーりや句ら雲虎和尙は答ふ出るも
束出の強指尺寸の不求ま不求忘の太及
海和保ふる孫くは一心源はよよての
弘明唯その修てたふ句をいひ
草益此に業ちるは一切経も草益の
嬌に我平の若の念仏と句とちり極
よ地獄へ入るの同出る一和玉
燈已耀一燈心中黙つる有明鏡全識人
り知るれ有る何ふにせふとあふぬ法
非人炎 卷上

そと家すぐく此のぬーと享保八年六十歳一と名成り
と改め冠里公若母君人仕人同く十一年四月六十有る一と
死に辞世「秋は月暮の曙」一官の愛の現るあやめは
國面氏の家のおおき人はドめ金つゝ學と一有とのひ後柳
み後てより性中と改む一時軒と号す「上元や松ははど
表れ月」とく教くある人改せ山極むとく世に後を
「常衣」いさぐ振ふる衣づく壯年より學を業とて難波
遊なり又出家能くして生名はゆえ保元年又改に

上清鬼妻

上清鬼妻の振舞伴舟の人針料を以て浪蕩と遊ぶ家
資困小豆一或人その一女被権貴に妻と賣んる或すゝむ
さく此を因縁す生性の嚴正なる太宰朝のぬーはる或

舊つ海邊と悪事を以てや死又た小亡沙若法會を妨ぐふと
いふ大いな家安強ふり考すぐい能満を重むはふんで
鬼妻といふえ孫京保北百来山と傳ひして名は才又はゆ
或財神を成一回せしむ「庭におおく咲く山菜うふ是端
的様何減柄樹子に依るのふを」注し「注し」つゝ麻ぬぬ
然情歎面「夏のあつとあつはちやと云れり」みよつ厚里と秋の
空を海とあつ山此句雄洋得事青蓮風骨「夕立の又や何
下弦はうき」砂水の捨取ち「出た声」夏の夜や妹が湯を
顔ふふ里「揚すとや何」面白は後を天性飄蕩して流
隔らば人云ふ詭秘するさ知ぬ庭一其はドめ句記して
已二十歳過ぎるは先沙松江の宿と梅舟列座の令々あつ
「ちよとんふ」近記もまき一若野山といふあつ「柳に

小西來山 附望平

十代體係齡いすゝ二十ふくは事をまゝく何宗と爲る十萬

十

尺はくり産して振息ふかゝる今も高松十萬雲より松すく
といふ蓋し西産産値も此多やを金といふも此豊の奇
うてな今我綜譜す所が如たふぬすす要するに西山のつ
此人出てより後世了大成きりるふた

前川由平と梅翁のつ子うて東山がゆたり歴年終るまで
自入と改むる作多く尺に拾や三々れ月はく今日の西山
がむらぬ山や雲は累々室永中津の玉也時又疑に



能家あ人読書と上終

